第三講　論理的文章の読解②

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

九州の南の海にある屋久島（やくしま）に、縄文杉と呼ばれる大木のあることはよく知られている。九州地方でいちばん高い宮之浦岳（みやのうらだけ）（一九三五メートル）を主峰にして山また山のかさなりあう屋久島のA<u>山奥</u>に、樹齢七千年ともいわれる老大樹が立っている。

――いまごろ、あの木の茂みは賑（にぎ）やかだろうなあ。

若葉の季節になると、ふっと、①<u>あの老いた杉</u>の茂みを思うことがある。

――いろいろな新緑にあふれている茂みに、蝶（ちょう）が舞い、鳥が飛びまわっていることだろう。根かたにはたくさんの虫が這（は）っていることだろう。

ふつう杉の木には虫も鳥もすくないものだが、縄文杉にはさまざまの広葉樹が着生しているので、虫も鳥もやってくる。あの老大樹の前に立ったとき、僕ははじめ目を疑ったものだった。杉の木とは見えなかったのだ。太い幹のねじれやこぶも異様ではあったが、それよりも、葉の茂みがとても杉とは思えない豊かさで、風にさわさわと揺れていた。茂みのなかを虫も鳥も飛んでいた。

たしか二十種類ばかりの着生木が、縄文杉を足場にして育っているのだ。その大半が落葉広葉樹だ。新緑の季節にはB<u>樹種</u>によってさまざまな色合いの若葉を茂らせるだろう。ずいぶん大きい木も育っている。地上に下ろせば一人前の木が何本も、あの木の肩や首に乗って伸びている。

縄文杉そのものも、たくさんの種類の木々が共生している森のなかの一本の大木なのだが、縄文杉と着生木もまるでそれだけでもひとつの森のように共生している。

僕が②あの木の下で一夜を過ごしてきたのは七年ばかり前の春のことだったが、そのときよりも今のほうが、あの共生の姿に目をひかれている。

縄文杉の下での夕方と夜と朝の時間、僕は着生木をたくさん宿らせているあの木を、まるで森だなあと思いながらも、むしろ木の大きさに圧倒され、七千年という歳月に圧倒されていた。

着生木と共生しているからこその長大な生命なのではないか。そう思いだしたのは、あとで繰り返し縄文杉の姿を思い返してからのことだった。あの木がなぜ七千年を生きてきたのか。四千年、いや三千年という説もあるけれども、それはどうでもいい。とにかく数千年を生きてきたのには、たくさんの幸運がかさなっているだろう。C雨量とか地形とか、土質とか日射量とか、いろんな条件もよかったのだろう。だが、そのうえで、着生木との共生があの大木を生かしつづけているのではないかという気がする。

種類のちがういろんな落葉が、あの木の根もとには散りつづけてきたはずだ。広葉樹の落葉が多いから、腐植が早い。虫たちが寄ってきて噛みくだいてもくれる。地中菌がD分解してくれる。縄文杉自身の杉葉よりもはるかに豊かな落葉が、土を育ててくれているのだ。虫がたくさん飛びまわり、彼らの死骸も土を肥やしてくれる。その虫や着生広葉樹の花や実を食べにくる鳥たちが、しょっちゅう糞をおとしている。糞のなかの種子がまた新しい着生木を芽生えさせもするのだが、なにより鳥の糞は最良質の肥料である。雪の季節はともかくとして、春から秋にかけては四六時中鳥たちの糞が縄文杉の根まわりの土を養っている。

着生木たちが縄文杉のおかげで生きているのはもちろんのことだが、③縄文杉もまた着生木のおかげを受けているのではないか。

（高田　宏「森へ行く日」より）

（注）着生＝植物が他のものに付着して生育すること。
腐植＝ここでは、落葉などが地中で分解されること。

1　本文中のA～Dの━━を付けた熟語のうち、熟語の構成（組み立て）が他と異なるものが一つだけある。その記号を○で囲みなさい。

A　B　C　D

2　①あの老いた杉とあるが、次のうち、この縄文杉の説明として本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　縄文杉の着生木はすべて落葉広葉樹であり、新緑の季節にはあざやかな緑一色の若葉を茂らせる。
イ　縄文杉は太い幹のねじれやこぶが異様ではあるが、風に揺れる豊かな葉の茂みは他の杉と同様である。
ウ　縄文杉は二十種類ほどの着生木を宿らせており、一本の木でも全体としてひとつの森のようになっている。
エ　もともと杉の木には虫や鳥が集まりやすく、大きな縄文杉の葉の茂みには一年中たくさんの虫や鳥が飛んでいる。

ア　イ　ウ　エ

3　②あの木の下で一夜を過ごしてきたとあるが、縄文杉の下で一夜を過ごしたときの筆者の様子についてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、**十五字程度**で書きなさい。

多くの着生木が育っている縄文杉を見た筆者は、［　　］に強く心を打たれていた。

4　③縄文杉もまた着生木のおかげを受けているのではないかとあるが、本文中で筆者は、縄文杉はどのような点で「着生木のおかげを受けている」と述べているか。本文中のことばを使って、**五十五字程度**で書きなさい。

【大阪府】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、〔問1〕～〔問7〕に答えなさい。※印には（注）がある。

私たちａ人間は、自然や生きものの世界からさまざまな恩恵をｂ受けている。その恩恵は、日本ではｃ古くから「自然の恵み」といわれてきた。わかりやすいのは、海の幸、山の幸として知られる魚介類や山菜など、食料となる自然のＡ恵みである。日本は四方を海に囲まれ、魚や貝、エビやカニなどの魚介類にめぐまれている。私たち日本人は、この海の幸をｄ重要な食料として生活を成り立たせている。また、日本の陸地の多くは森林におおわれ、そこでは山菜からキノコまで、多様な山の幸が得られる。これも、四季折々の食材として重要視されている。

最近、自然の恵みは、「生態系サービス」という語に置き換えられることが多い。意味するところは基本的に同じだが、生態系サービスの方は、自然や生きものの保全や利用、管理のあり方を視野に入れた、より積極的な概念として位置づけられる。生態系サービスは、供給サービス、調節サービス、文化的サービス、基盤サービスの四つに区分される。

供給サービスとは、食料、水、木材、医薬品原料、燃料などの供給にかかわるものである。調節サービスとは、人間が生きていく場としての環境の諸条件を調節する自然の恵みのことだ。Ｂ文化的サービスとは、生きものや自然にふれあうことによって得られる、喜びや楽しみなどの精神的な恩恵のことである。バードウォッチングで得られる楽しみは、その代表的な例だ。基盤サービスは、ほかのサービス全般を支える生態系の基本的な機能そのものといえる。植物による光合成などがそこにかかわっている。

このように、どう呼ぶかは別にして、私たちは自然や生きものの世界から、じつにさまざまな恩恵を受けている。だが、私たちは日頃、こうした恩恵をどれだけきちんと認識しているだろうか。魚や貝、あるいは澄んだ水や空気はあってあたりまえ、木々だって、伐ってもまたすぐに生えてくるもの、くらいに思っている。しかし、こうした自然や生きものが織りなす世界「生物多様性」とそれがもたらす自然の恵みは、人口増加と一人あたりの消費量増加にともない、身近なところからも地球規模でも急速に失われていっている。Ｃあたりまえに思っていることが、あたりまえではなくなってきているのだ。

二〇一〇年一〇月、名古屋で第一〇回生物多様性条約締約国会議が開かれた。生物多様性の危機の現状が報告され、その保全や管理のあり方などが活発に議論された。その様子は、新聞やテレビなどでも広く報道され、ちょっとなじみにくい生物多様性ということばも、国民の間にどうにか浸透したかに見える。

だが、世の常として、会議が終われば関連の物事への関心は日々薄まっていく。しかし、日本や世界の今後の生物多様性の状況を考えると、薄まっていってよいものでは絶対にない。では、どのようにして関心を保っていくことができるだろうか。理屈を並べたてても、日常的には効果は少ないのではないかと思われる。ひとつのよい方法がある、と私は思っている。次のようなことだ。

私たち日本人は、食事をする前に、「いただきます」という。これは通常、農家の人たちが苦労して育て収穫したお米や野菜を食べることに対して、あるいはそうした食事ができるひとときに感謝の気持ちを込めていっている。しかし、私たちが口にしているものの多くは、たいせつな自然の恵みであり、生態系サービスの［　　］サービスにかかわるものである。私たちは、じつは古くから、こうした自然の恵みに感謝し、あるいは、ほかの生命（いのち）を犠牲にして自分の生命をつないでいることへのありがたい気持ちを表現するものとして、「いただきます」といっていたのではないだろうか。つまり、いただきます、とは、あなたの生命をありがたくいただきます、という生きものや自然への※畏敬（いけい）の念をあらわしていたのではないだろうか。それがすべてではなかったにしても、少なくともそうした意味は込められていたのではないかと思われる。

最近、内田美智子（うちだみちこ）さんの『いのちをいただく』という本に出合った。ほかの生きものの命を犠牲にして私たちの命が成り立っていることを、牛をめぐる日々のことがらの中で見事に描いた本だ。牛以外のいくつかの生きものをめぐる話も展開されている。生物多様性との関連で書かれているわけではないが、命をいただく、という意味を考えるうえでは共通したところがある。

D 現在では多くの家庭で、「いただきます」は儀礼的、あるいは単なる習慣として使われているように思われる。しかし、たちかえって、自然の恵みに感謝し、あなたの生命をありがたくいただきます、という思いをたいせつにすることは、私たちが身近な自然や地球の未来を考えていくうえで大事な一歩となるように思われる。

食事の前に、いただきます、といったことばを声に出す習慣、文化は、日本独自のものであるようだ。豊かな海の幸、山の幸のある中ではぐくまれ、そうした恵みに感謝しつつ、それを絶やすことなく利用してきた日本人の文化がもつ、すぐれた一面であるように思われる。

この、いただきます、のことばは、自然の恵みに感謝し、あなたの生命をありがたくいただきます、という意味とともに、国内外にもっと拡(ひろ)められてよいのではなかろうか。

おそらく、食後の「ごちそうさまでした」のひとことにも同様なことがあてはまる。

このささやかなひとこと、ふたことによって、生物多様性の保全が飛躍的に進むことにはならないだろうし、生命の尊厳と利用をめぐるむずかしい問題を解決することにもならないだろう。しかし、E日本や世界の人が、自然の恵みに感謝しつつ「いただきます」「ごちそうさまでした」を日常的に口にするようになれば、自然や生きものの世界は少なからずよい方向に向かうのではないかと思われる。

（樋口広芳(ひぐちひろよし)「鳥・人・自然」より……一部省略等がある。）

（注）・畏敬＝おそれ敬うこと。

Step 2

〔問1〕本文中のA恵みと品詞が同じものを〰〰を付したa〜dの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

Step 2

〔問2〕本文中、B文化的サービスとは、生きものや自然にふれあうことによって得られる、喜びや楽しみなどの精神的な恩恵のことであるとありますが、そうした生きものや自然の恩恵については、多くの古典で取り上げられてきました。

次の古文を読み、あとの(1)〜(3)に答えなさい。

Ⅰ 三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。Ⅱ 桃の花の今咲きはじむる。Ⅲ 柳などをかしきこそさらなれ。Ⅳ ^(あ)それもまだ、まゆにこもりたる（芽ぶいて十分にひろがらない）はをかし。ひろごりたるはうたて（不愉快に）^(い)ぞ見ゆる。

（「枕草子」より）

(1) 文中の^(あ)それが、指す内容を古文から抜き出して書きなさい。

(2) 文中の^(い)ぞ見ゆるには係り結びという表現が用いられ、「うたて」が強調されている。同じように係り結びが用いられている一文を、Ⅰ～Ⅳの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

(3) 筆者は、この文章全体を通して、草木のどのような様子を「をかし」と言っていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア うららかな春の日差しの下で、草木がのんびりと休んでいる姿。
イ うららかな春の日差しの下で、草木が芽を外に出そうとしない姿。
ウ うららかな春の日差しの下で、草木がようやく立派に成長した姿。
エ うららかな春の日差しの下で、草木がこれから育っていこうとする姿。

Step 3
〔問3〕本文中、Cあたりまえに思っていることが、あたりまえではなくなってきているとありますが、これはどのような状況を述べていますか。文中の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

Step 3
〔問4〕本文中の□にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 供給　イ 調節　ウ 文化的　エ 基盤

Step 3
〔問5〕本文中、D現在では多くの家庭で、「いただきます」は儀礼的、あるいは単なる習慣として使われているとありますが、これはどのようなことを言ったものですか。最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア「いただきます」という言葉が日本人の生活に深く浸透して使われているということ。
イ「いただきます」という言葉に込められた思いが忘れられたまま使われているということ。
ウ「いただきます」という言葉を子どもへのしつけとして大人が無理やり使わせているということ。
エ「いただきます」という言葉が料理した人に対する感謝の念を欠いたまま使われているということ。

Step 3

〔問6〕 本文中、E日本や世界の人が、自然の恵みに感謝しつつ「いただきます」「ごちそうさまでした」を日常的に口にするようになれば、自然や生きものの世界は少なからずよい方向に向かうのではないかと思われるとありますが、なぜよい方向に向かうと筆者は考えていますか。その理由を述べた次の文の□にあてはまる表現を、文中の言葉を用いて、七十字以内で書きなさい。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

「いただきます」「ごちそうさまでした」を日常的に口にするようになれば、□

Step 3

〔問7〕 本文中で取り上げられている「いただきます」「ごちそうさまでした」のように、日常生活で私たちがよく使う言葉として「おはよう」「行ってきます」「ただいま」「おやすみ」という言葉があります。
この四つの言葉の中から一つを選び、その言葉がもつ、人と人とのコミュニケーションにおける言葉の力について、あなたの体験を含めて書きなさい。
ただし、次の条件(1)、(2)にしたがうこと。

［条件］
(1) 原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。ただし、題名や自分の氏名は書かないこと。
(2) 八行以上、十行以内であること。

【和歌山県】

第三講　論理的文章の読解②

Step 1

一

解答

1、D　2、ウ　3、木の大きさと七千年という歳月（14字）（同意可）　4、種類のちがういろいろな落葉や、広葉樹に寄ってきた虫の死骸や鳥のおとす糞が、縄文杉のまわりの土を育てている点。（54字）（同意可）

解説

1、上の漢字が下の漢字を修飾している熟語と、同意の漢字の組み合わせの熟語を区別する。

2、「さまざまの広葉樹」が着生し、虫や鳥がやってくると述べたあとで、「たしか二十種類ばかりの着生木が、縄文杉を足場にして育っている」「縄文杉と着生木もまるでそれだけでもひとつの森のように共生している」とある。

3、「あの木の下」での「一夜」を「縄文杉の下での夕方と夜と朝の時間」と言い換え、「まるで森だなあ」という思いよりも、「むしろ木の大きさに圧倒され、七千年という歳月に圧倒されていた」と述べている。

4、「着生木との共生が…生かしつづけているのではないかという気がする」としたあと、くわしく説明している。「落葉」「虫たち」「鳥たち」がもたらすものをおさえる。

Step 2・3

二

解答

〔問1〕a（または、c）〔問2〕⑴柳〔など〕　⑵Ⅲ　⑶エ　〔問3〕生物多様性とそれがもたらす自然の恵みが、急速に失われて

いっている状況。（35字）（同意可）〔問4〕ア　〔問5〕イ　〔問6〕生命をいただいているという思いをたいせつにすることにつながり、身近な自然や地球の未来に対する関心を保っていくことに結びついていくから。（67字）（同意可）
〔問7〕（例）「おはよう」は、一日の始まりのあいさつの言葉である。朝学校に行き、友だちと「おはよう」という一言を交わすだけで、今日もみんなと一緒の一日が始まるという気になり、やる気がわいてくる。さらに、その日の天気や宿題などについて会話が始まるきっかけにもなる。このように、「おはよう」は、朝そこに集まった人たちの心を一瞬にして結びつける力や、一日を前向きに過ごそうという気持ちにさせてくれる力をもつ言葉だと思う。（10行）

解説

〔問1〕「恵み」は活用のない自立語で、主語にすることができる名詞。cは、昔という意味の名詞として使われることがある。
〔問2〕⑴ 前のⅢの主語を指している。⑵ 文中に係助詞の「ぞ・なむ(ん)・や・か」があると、文末は連体形で結ばれ、「こそ」があると已然形で結ばれる。⑶ 桃の花が咲きはじめる様子や、柳が芽ぶく様子を「をかし」とし、芽がひろがってしまっているのは「うたて」としている。
〔問3〕「魚や貝、あるいは澄んだ水や空気」があり、「木々だって…またすぐに生えてくる」という、「『生物多様性』とそれがもたらす自然の恵み」は「あってあたりまえ」だと思っていたが、「身近なところからも…失われていっている」という状況になっている。
〔問4〕「私たちが口にしているもの」の多くは「自然の恵み」であるので、四つの「サービス」の説明から、「食料」をもたらしてくれるサービスをおさえる。
〔問5〕「自然の恵みに感謝し、あなたの生命をありがたくいただきます」という思いが込められずに使われている、ということ。
〔問6〕「自然の恵みに感謝し…たいせつにすること」は「私たちが身近な…大事な一歩となるように思われる」ということが、「よい方向に向かうのではないか」と考える理由となっている。

口語訳

三月三日は、うららかにのどかに日が照っている。桃の花が今咲きはじめる。柳などが趣があるのはなおさらである。それもまだ、芽ぶいて十分にひろがらないのが趣がある。ひろがっていては不愉快に見えることだ。